

ちの遊び行動についての知見にもとづき、そのあそび空間・あそび場所を、「自然スペース」「オーブンスペース」「道スペース」を中心的な空間とし、また「アナーキースペース」「アジトスペース」「遊具スペース」を従の空間とする六つの原空間によって成立するものとする。そしてそれぞれを類型化した遊びと関連させて、それぞれの空間の特質と相互関係とがあきらかにされる。これは子どもの遊び空間をみていく上できわめて示唆

的である。そのほか、Ⅱ 子どもの空間、Ⅲ 世界の子ども、Ⅳ あそび環境の現在、Ⅴ 子どもと大人、という五章からできた本であるが、楽しく読めて、学ぶところの多い本である。読んで「わかる」だけでなく、「わかった」ことを仲間と力を合わせて、行動に移していただきたいと思う。期待します。

(お茶の水女子大学)

『鳥獣戯語』

福音館書店 (八五〇〇円)

皆川 美恵子

夏休みの読書にふさわしい一冊の本を御紹介しましょう。動物の物語がどっさりと盛り込まれ

た、美しい図版もたっぷり添えられた、それはお洒落でリッチな大御馳走級の本です。内容がへ

ビーだけでなく、本体の重量もありますので（五五二p、一・四三kg）、腹筋力や腕力が充分にある方でないかぎり、寝ころんで読むことはお勧めできません。では勉強机の上でと、しっかり構えたのでは野暮ったさすぎます。野暮とは無縁な、戯れ心に溢れた華麗な遊びの本なのです。

最もふさわしいのは、夏休みのけだるい昼下がり、外出するの人も人と会うのも億劫な、でも何か心がうち向かう悦びを探している時、涼風の通うお気に入りの場所で、大好きなおやつを用意して、背もたれ椅子でページを繰ることではないでしょうか。贅沢な本ですから、贅沢な時間の中で読んでいただきたいと思います。

『鳥獣戯語』と題されたこの本には、日本の中世の説話を中心として、神話、昔話、詩歌、ことわざ、などなど、落語、歌謡曲などから動物に関連した物語が、二〇〇以上も集められています。まるで物語によって構成された多種多様な動物の

王国、物語による歴史動物園が浮かび上がってくるのです。

私たちの祖先が、動物の生命をどのようなものと考えていたかは、その時代その時代で、動物の物語をどのように語っているかということにつながります。ですから残されている動物の物語は、日本人が動物の生命をこのようにとらえたという生命誌による歴史なのです。この本の編集者は、これらの動物の生命の物語による歴史を、さらに読み解くという、繊細かつ大胆な試みをしています。多様性を豊かに湛えながら、日本人の動物観の歴史にせまろうという〈新しい歴史研究〉の作業を企てているのです。おびただしい数の動物物語が、どのような順序で配置され、どのような側面から光があてられ、どのように構成されているか、そのことが編集者の歴史観の表明なのです。始まりは山の写真です。山に入り、山を下り、里へスポットがあてられていきます。そして東寺

の塔に住みつく鼠の物語が紹介されます。美しい色彩の御伽草子絵巻『弥兵衛鼠』の、結婚を契機とした波瀾万丈の物語。結婚、子宝、繁栄と、生命力の噴出による幸福への想像力は、人間の身近にいる小動物鼠によってになわれてきたのでした。

鼠から十二支が活躍する『十二類絵巻』という、アイルランドのチェスター・ビートイ図書館所蔵の貴重な絵巻が登場します。これは十五世紀中葉の京都を中心とする、貴族文化的意味合いをもつ十二支の動物と、地方的な悪党、土民をうかがわせる野生的な動物（狸を首領とする）との合戦絵巻です。狸など境界的な異類が文化を挑発するという、動物による人間社会の擬人化でしょうが、これは人間内（動物内）だけの話ではなく、まさに人間と動物との関係そのものです。見慣れない動物は、日常生活から遠くへ追いやられないとはいけないのです。野生の動物は、人間の世界

観では異界という闇を秘めています。しかし、この闇こそが「私」「我々」という意識の光を、光たらしめているのです。

ある動物学者の体験談ですが、泣いている二歳の孫をあやしていた時、「そんなに泣くと狸が来るよ」と言ったところ、孫は「狸さんお友だちな」と答えたそうです。狸を悪者に仕立てられないと知った学者は、本棚から『絶滅恐竜大図鑑』を取り出し、将来、仲良しになることはないだろう翼竜の中から、最も恐ろしいブテラノドンを探し出し、泣くと天上にブテラが潜んでいてやってくる、ブテラの物語作りを開始したそうです。

本題に戻りましょう。自然と文化、闇と光のつなぎ手である動物たちの物語が、ぞくぞくと続きます。狐、鹿、亀、鳥、梟、鷹、雀、鶯、蜘蛛、蜂、蛇、ミソサザイ、そして猫の物語。

さて、終わり方に編集者の動物観・生命観が顕

著に表れています。山と里、人間と獣、文化と自然の想像力の架橋の中から誕生した、「山姥と金太郎」の物語が配置されているのです。母子説話に、文化の中の異和性の光源、生命の根源を夢想してやまないのです。

この本は、子どもにお話をする時に、お話を取り出す宝箱になることでしょう。また、自分の動物観・生命観を考えなおす手がかりにもなるでしょう。私は、鮭の話が収録されているものの、鯨、鯰、蛸、烏賊、それに魚と、海の動物の物語が少ないのが気になります。地球環境が壊され、

森や山野から動物が消え出し、海の神秘が浮上しています。巨大水族館が次々と生まれています。が、今、最も、「生」の神性を新しくなるのは魚ではないでしょうか。大都市で魚たちは、海を賦活する周縁へと誘うかのように、夢想の海を泳いでいるのです。私たち日本人の祖先が山人か海人か里人か、『古事記』以前の、言葉以前の彼方へと導いてくれるのは、動物のイメージだけなのかもしれません。

(十文字学園女子短期大学)

子どもの「じっこ」遊びを楽しむ、

理解するために

『「じっこ」の構造—子どもの遊びの世界—』

C・ガーヴェイ

高橋たまき訳

サイエンス社

一九八〇